

石 丸 久 著

おもかげ艸子

—古典の心をかいまみて—

松毛加今艸子

石丸久

おもかげ艸子

—古典の心をかいまみて—

昭和四九年八月一日 初版発行

定価 九〇〇円

検印省略

著者

埼玉県新座市栄五十二
いし まる ひさし
石丸久

発行者 学芸図書株式会社

代表者 北本幾右衛門

発行所 学芸図書株式会社

東京都千代田区神田錦町一六
電話 二九一—三〇二三・三八八七
振替口座 東京 九六四九一

は し が き

年ごろ請はれてさる雑誌に筆とりはべりつる文ども ひとびとのいたくいざなひたまふに ことびひとまきに編みなしはべりぬ こは もと いにしへの世々のめでたき書どものいとゆかしきに おほけなくも そのおもかげをしのびてむとのをさなきわざくれになむ かつは近き代の書のみあげつらひ西の文どもよみすさびておのづからなりはひとなりたるおのが身をかへりみ かつはふらんす国にすまひてふるさとのてぶりのゆかしきを忘れむずる娘に思ひをやり あるは ひさしく蟹の行くらむよこざまの文にのみしたしみていまはやまひに臥したまへるたらちねをばなぐさめむとてなり 今ほむかし赤門にどいつ法学ををさめたりしをの子と 青山にいぎりす文学を学びしめの子と ひそかにたづさへて早稲田の杜なる逍遙博士がなだかき沙翁の講筵に赴きぬ これわが父母なり 父ははやく天に召されぬ われは幸に都の西北の方に学びぬ かのいぎりす国にちやあるす・らむといへるもの かつて沙翁がたへなるくさぐさの劇詩をとりて おのがつねなる言の葉にいみじう語りあらためけるが かつはこれにまねびかつは甲島園の大人五十嵐力博士がみ教へをむねと おのれもかくはものしはべるなり 題しておもかげ艸子といふはそのかみ外つ国の詩ともいとうるはしく和らげあつめて於母影と名づけし鷗外漁史らがちゑにならひしのみ

みちのくのまののかやはらとほけどもおもかげにしてみゆとふものを

万葉集

ふみつき わいか

母が八十まり二かへりの誕生の日

ひさし

目次

はしがき	一
悲劇の皇子	一
古事記から	一
月の故郷へ	一五
竹取物語から	一五
昔男ありけり	二六
伊勢物語から	二六
亡き娘を偲んで	三三
土佐日記から	三三
母のおもかげ	三七
源氏物語から	三七
つきせぬ愛	三九
和泉式部日記から	三九
好色者の少将	七
堤中納言物語から	七
横笛あわれ	一〇
平家物語から	一〇

物ぐさ太郎	――御伽草子から――	一一五
あの世のちぎり	――冥途の飛脚から――	一二三
武士の情け	――勧進帳から――	一四五
余った一両	――西鶴諸国咄から――	一五九
重陽 ちようよう のちかい	――雨月物語から――	一七三
弥次さん・喜多さん	――東海道中膝栗毛から――	一八七
わらいのくさぐさ	――江戸小咄から――	二〇三
あとがき		

桂　ゆき　挿画

悲劇の皇子

—古事記から—

作品の成立について

古事記という書名は、文字通り古くから伝えられた事を記したものであるという意味である。異説はあるが、一般には元明天皇が和銅四年（七一）に、太安万侶に命じて、神田阿礼の暗記した事柄を、文章に記録させたものといわれる。完成したのは翌和銅五年で上・中・下の三巻から成っている。

作品の性格について

上巻は天地開闢の神話から神武天皇の誕生まで。中巻は神武天皇

の東征から応神天皇の時代まで。

下巻は仁徳天皇から推古天皇に至るまで。全篇を通して、神話から実在の人間への歴史の流れが分かるが、もともと、各民族のもつ神話伝説を統一して、大和朝廷を中心とする国家の成立と、天皇の權威の由来を明らかにしようとする政治的意図が含まれていた。

「日本武尊」の話は、古事記の中でも有名なエピソード。この暴れん坊でいながら、心にやさしさを持った偉丈夫ぶりを理想像としたところに、上代人の純真素朴な生活感情が汲みとられよう。

昔、美濃の国造の娘にエヒメ・オトヒメという姉妹がいた。二人とも大変な美人だという評判が都にまで伝わり、

時の天皇はその真偽の程を確かめた上、是非とも宮中に召し出だしたいものだと考えて、皇子大碓命を下檢分に遣わされた。ところが、この皇子なかなかのチャッカリ者、この姉妹を吾がものにしてしまい、別の女の子を適当に見つゝくろつて、へはい、これがお待ちかねの娘たちでございますVとばかりに父帝に差し出した。

と、一方この天皇はどうしてどうしてその道にかけての海千山千、すぐにへこいつはどうもおかしいぞVと気がついて、二人を身の側に侍らせておきながら、周囲の思わくを気にし、わざと手も触れぬようにして人悪くじらしていた。大碓命は、さすがに心に疚しいところがあるせいか、それからというもの、宮中のしきたりを無視して朝夕の会食にさっぱり姿を見せない。もともと人一倍猜疑心が強く、気の小さい天皇は、一抹の不安を感じて、大碓命の弟に当たる皇子小碓命を呼び寄せ、厳しく命じられるのであった。

「よいかな、しかと命じおくぞよ。その方の兄は、ちかごろ、一向に会食に出て参らぬようじゃが、どうしたわけであるか？ その方からよく諫めて、朝も晩も必ず顔を出すように言え！」

それから五日も経つというのに、まだ一度も姿を見せぬ不逞の長子に、すっかり業を煮やした天皇は入さては朕に叛く気だな？Vと憂いのつるまま、再び小碓命を呼びつけ、詰問した。

「兄はまだ参らぬではないか。どうしたのじゃ？ その方、朕の申しつけた通りに致さぬのではないか？」

「いいえ。私はご命令通りに致しました」

「何？ 申しつけた通りに致したと？ しかれば、どのように致したのか？」

「はい、私は兄命が朝、廁に入るのを待ち伏せ致しまして、ぐっとひつ捕えて手足をもぎ取り、その屍は席に包んで

棄ててしまいました」

「その方はまた、な、なんという恐ろしいことを！」

天皇はただただあきれて、身の丈一丈もある皇子の顔を見つめるばかりであった。そして内心こう思った——八こんな不敵な面魂をした野蛮な男を、わが子とはいえ、都においておくわけにはゆかぬ。都は、都らしく雅びやかに、人も和を尊ぶようにならねばなるまい。それに、こんな男が都にいたのでは、朕が心安らけく政にいそしんでいることもかなうまいし……そうだ、よい策がある——▽

「よいか、その方にしかと命ずることがある。謹しんで承るがよい。はるか西の方九州の地に、熊曾というて、昔から一向に帰順せぬ者共がおる。その方、直ちに征って、みな殺しにして参れ！」

時に、この勇猛なる偉丈夫も年はわずかに十六歳、髪の毛をあげると、顔はいかにもあどけなく見える。天皇の詔をかしこみ、いよいよ小碓命が出発するに際し、伊勢の大神宮に仕える叔母の倭姫命は、天照大神の加護を祈って、自分の衣裳を一揃い愛する甥に持たせてやったのであった。

※

※

※

命が目指す所に着くと、熊曾の一族は家を新築し、軍勢に三重に囲ませてそれを警護していた。見ると、数日の後には新築祝の宴を催そうとしているらしい。そこで命がじっと待ちつづけているといよいよ時は来た。命は少女のようには髪の毛を下げ、叔母命から授かった衣裳を身にまとうて女装し、熊曾建に仕える女達の中にまじって家に入った。ところが熊曾建兄弟は、命を美少女とばかり思って招き寄せ、二人の間に坐らせた。宴も酣なる時、命はすきを見て兄の方を懐剣で刺し、逃げた弟を追って後から剣で尻を一突きして、大地に組み敷いた。弟は苦しい息の下から喘

ぎ喘ぎ声を励まして問う。

「あ、あなた様は、一体、何といわれるお方ですか？ お、お名前をば承りたい」

「わしはな、この国の中央でまつりごとをばみそなわす天皇の皇子で、まつろわぬその方共を討ちに下った小碓命と申す者じゃ」

「な、なるほど、さようでございますか。こちらの西国には、われわれ兄弟を除いて強い者はおらんはずですが、倭国にはもっとお強い方がおられたわけですな。ああ、とにかく感服つかまつった。い、今より後は、ど、どうか御名を日本武尊とお改めくださるよう」

命はこれを聴き容れて日本武尊と名を改め、この熊曾の弟を熟した瓜を破るように真二つに切り棄てた。

それから更に各地の豪族を征伐して歩き、出雲の国に入つてその地の猛者たる出雲建を討とうと思つたが、胸に一策を案じて、一応これと友達になつておいた。それから、尊はイチイの木で似非の刀を作り、自らそれを腰に帯びて行き、建を誘つて一緒に肥河で水浴びをした。先に水から上がった尊は、岸に置いてあつた建の太刀を取つて佩き、「おーい、出雲の建よ。われらは友達同志なのだから、どうだな、一つ、太刀の取りかえっこをしてみないか？」

「ああ、それもよからう」

おくれて河から上がつてきた建も賛成して尊の太刀を、まさか木刀だとは知らないで腰に着けた。

「さあ、建、どうだ、私と一手合せてはくれまいか？」

試合を挑んだ尊がキラリと太刀を引き抜くと、建も、へよしVとばかりに刀の柄に手をかけて抜こうとする。が、どっこいこれは抜ける道理がない。目を白黒してもたもたしている中に、白刃が一閃した。建の首は無かつた。そこ

で尊は一種の感慨をもよおして歌う――

やつめさす 出雲建が 佩ける太刀 黒葛さは巻き さ身無しにあはれ

〔出雲建が腰に帯びた太刀は、ツヅラを沢山巻いてはあるけれども、刀身を抜くことのできぬ木刀である。こんなものにだまされて一命を落とすとは、この地方切つての猛者とも思われぬ最期だなあ。やれ、やれ、あわれなことじゃて……〕

※

※

※

このようにして、命じられた西征の大任を果たした尊が都に凱旋し、父帝にその由を復命する。ところが、疑い深い天皇は、わが皇子の労をねぎらい、功を賞するどころではなく、またまた命を下してみことるのであった。

「よい、その方、今度は、東方十二国を征し、未だ朕に帰順せぬ不埒な者共を平定して参れ！」

再度の出征にも、天皇は耳建日子を副将とし、その象徴に柊の八尋矛という長い矛を与えただけだった。東国に向かう途上で、尊は伊勢の大神宮に詣でたが、その時、また懐しい叔母の倭姫命に会い、切々と訴えるのであった。

「叔母命さま、私は悲しくてたまらないのです。父帝は、この私のことを死ねばよいとでもお考えなのではありませんか。どうもそうとしか思われません。先に九州に遣わされ、あの兇暴な熊曾どもを討って帰ったと思うと、直ちに今度は東国征伐をお命じになるのですもの。しかも、新手の軍勢は一兵もくださらないですよ。兵たちも可哀さうではありませんか。してみると、どうしても帝は私に死ねと願っておられるようにしか思えないではございませんか。こんなに都を離れて父帝のため、国のため苦勞ばかりしている私が、何故そのようなお憎しみを受けなくてはならないのでしょうか？ しかも、血を分けた実の親子であると申しますのに……」

偉丈夫とはいいいながらまだ青年、父帝の愛を得られないわが身の薄倖を、心許す叔母に訴えてはそつと涙ぐむのであった。

「まあ、まあ、そうお泣きなさいますな。帝には何かお考えがあつてのことと存じます……。それに……」

「それに……何でございますか。叔母命さま」

「はあ、それに……そなたは余りお強すぎますし、それでいながらお優しいところがあまりで、部下の兵達に慕われておいでですし……」

「私が強すぎる、部下達に慕われる……それが帝のお気に召さぬのでしょうか？ 何故でしょう、叔母命さま、どうぞ教えて下さい」

「いや、いや、まあ、さようなわけでもありませんまいが……。おお、そうじゃそうじゃ。この袋を身に着けて征かれるがよい。万一火急の折には開けてごらんになりますよう」

倭姫命は、何か小さな袋と、天照大神の加護を祈りこめた草薙の剣とを孤独な甥に、はなむけとして与えた。

日本武尊が尾張の国に来かかった時、美夜受姫という土地の美人と一夜を共にしようかと思つたのであつたが、しかし、へいや待てよ、これからの東国征伐は果たして無事に果たすことができるかどうか？ そうじゃ、この鄙にも稀な美人と寝るのは、めでたく凱旋できるその日まで、おあずけということにしようVと思ひなおして、その約束だけをとりかわしておいた。

※

※

※

尊はそこから出発して、途々、大和朝廷にたてつく者共を征伐しながら、相模の国に到着した。すると、土地の

国造がたばかつてこう言上した。

「日本武尊さま、実は、この国の野原に大きな沼がございましてな、その沼にはまたこの上もなく気の荒い神が住んでおります。そいつを討ち滅すことのかなう者は、まあ、なかなかございますまいけれど……」

「なに？　気の荒い神とな？　よろしい、私が一つ取りひしいでくれよう。その方達はまあ安心して見ておるがよい」
わるがしこい国造の暗示にまんまと乗せられた、真正直で単純な尊が、どどん野に分け入って行った時、機もよしと国造は野に火を放った。

△さては——はかりおったな。ようし、どうしてくれようか？　△と思案する尊の頭に、咄嗟に閃めいたのはあの伊勢で叔母命から賜わった小さな袋である。今こそその袋を開けてみると、中から火打石が出てきた。

そこで、刀を抜いて身の廻りの草を薙ぎ払った尊は、その草にこの火打石で向火をつけて、逆の方向に火を燃えて行かせた。この時である、もうもうたる煙の彼方に、部下達に護られた妃の弟橘媛の姿がチラッと見えたのは。と、尊は思わず大声で叫んだものだ——

「おお、妃よ、大事ないか——そなたは？　いま、そちらにもどるからな。心配するでないぞ」

九死に一生を得た尊は、腹黒い国造共を討ち殺し、これにも火をかけて焼き棄てた。この地を今でも焼津というのはこのためである。

ここを発ち、船で海に出、今の浦賀水道のあたりを通ると、海神が怒り狂って、さかまく波浪に船は木の葉のようにもてあそばれ、ぐるぐる旋回するばかりであった。この時、海神の怒りをなだめる人身御供の役を買って出たのは弟橘媛である。

「強く、おやさしい尊さま、私は今、あなた様に代って海に入り、海神の怒りをときましよう。あなた様には、どうぞ、どうぞ、ご無事で大任を果たされまして、恙なく都にお帰りにられますよう」

可憐な妃は、海面に菅疊八枚、皮疊八枚、絹疊八枚を敷き重ねて、その上に降りて海に沈んで行った。その別れの時に歌った歌は――

さねさし 相模さぶの小野に 燃ゆる火の 火中ほなかに立ち
て 問ひし君はも

「今、この世のおいとまを申し上げるにつけて思い出されますのは――あの相模の野で火に囲まれ、危機一髪という時でさえ、あなた様は、ご自分のことよりもこの私のことを心配してくださったのでしたね。力はお強いのに、お心のお優しい皇子さま、あなた様の御ためならば、私は生命いのちも何もいりません。本当に、今まで、幸せでございました。さようなら」

海神の心はすっかり和んで、船はそれから順調に航行



することができた。このことがあって七日目に、海岸に弟橘媛の髪にさしていた櫛がうち上げられた。尊はそれを拾い、御陵を造って、ていねいに収めたということである。

尊はぐんぐん兵を進めて見事に東国の平定をなし遂げ、今は帰京の途に在った。ちょうど、足柄山の麓で食事をしていた時、その山の神が白い鹿に化身して尊を目掛けて突進して来た。尊は咄嗟の機転で、食べ残しの蒜で鹿を打つと、目に当たって死んでしまった。尊は坂に登り、三度も嘆息をして、呼びかけるのであった――

吾嬬はや、吾嬬はや、吾嬬はや

「私は今また一つの危機を脱れることができた。これもそなたの加護によるものであろう。それにつけても、思い出されるのは、あの浦賀の海で、尊い犠牲となってくれたそなたのことである。一緒に都に帰りたと思っていたが、それができぬばかりでなく、いじらしいそなたが帰ってくれることももうあるまいけれど、私は死んでもそなたのことを忘れるはすまいよ」

この地を吾嬬（東）というのはこれから始まったのである。

そこから甲斐の国に出て、酒折宮に休んだ時、尊は次のように歌って、一座の者に問いかけた――

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

すると、側に侍っていた火焚きの翁、つまり夜、燈火をたく役の老人が直ちに答えて唱和した――

かがなべて、夜には九夜 日には十日を

つまり、「常陸の国の新治や筑波を通り過ぎてから、もう幾晩たったのかなあ?」という尊の問いに、「はい、さようでございますなあ、数えてみますと、夜は九晩、日は十日ということになります」と即答したのである。尊は

この老人の間髪を入れぬ唱和が嬉しく、その老い先を思いやって、その場で東の國造に任命してやった。

※

※

※

常陸から信濃に入り、その坂の神を服従させて、尾張の國に帰った時、往きに契つておいた通り、美夜受姫の所に寄った。そこで宴會が催され、姫は尊に酒の大杯を捧げたのであったが、ふとみると、その着ている衣の裾に月のさわりがついていた。これに気がついた尊が歌つていうには――

ひさかたの 天の香具山 利鎌に さ渡る 鶴 弱細 手弱腕を 枕かむとは 我はすれど さ寝むとは 我は思へど 汝が著せる 襲の裾に 月立ちにけり

美夜受姫はこれに答えて、はにかみつつも歌うのであった――

高光る 日の御子 やすみしし 我が大君 あらたまの 年が来経れば あらたまの 月は来経往く 諸な諸な 諸な 君待ち難に 我が著せる 襲の裾に 月立なむよ

つまり、「なあ、姫よ、私は東國征伐の重任を果たして今こそ都に帰る身じや。往きに契つておいた通り、今夜こそ天の香具山のあたりを、身も細やかに軽やかに飛びわたる鶴という白い鳥を、思い出させるようなそなたのたおやかな腕を枕に、一緒に寝ようと思つてきたのであったが、どうも残念なことだ。そなたは、今、月のさわりなのだ。よしよし何もそなたを責めているわけではないのだよ」という尊に、姫は、「尊い御身であらせられるわが皇子さま、年も月も、人にはおかまいなしに、新たに來るかと思えばまた永遠に往つてしまつたりもするものですね。あなた様に初めてお会いして、またの縁をお誓い申しあげましてから、年も月も幾度かあらたまり、私は今日のこの日をどんなにか心で待ち遠しく思つていたことでしょう。全く、あなた様がいらっしゃるのが待ちきれないで、月のさわりと